

公演日程

A program

第1559回 NHKホール
1/28 [土] 開演 6:00pm
1/29 [日] 開演 3:00pm

The 1559th Subscription Concert
on 28th (Sat.) & 29th (Sun.) January
at 6:00pm (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 ヘルベルト・ブロムシュテット
ヴァイオリン クリスティアン・テツラフ
コンサートマスター ペーター・ミリング(客員)

Herbert Blomstedt conductor
Christian Tetzlaff violin
Peter Mirring guest concertmaster

ブラームス/ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77 (40')

Johannes Brahms (1833-97)
Violin Concerto D major op.77

休憩

Intermission

ブラームス/交響曲 第1番 八短調 作品68 (45')

Johannes Brahms
Symphony No.1 c minor op.68

B program

第1561回 サントリーホール
2/8 [水] 開演7:00pm
2/9 [木] 開演7:00pm

The 1561st Subscription Concert
on 8th (Wed.) & 9th (Thu.) February
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮 ヘルベルト・ブロムシュテット
ピアノ ラルス・フォークト
コンサートマスター ペーター・ミリング(客員)

Herbert Blomstedt conductor
Lars Vogt piano
Peter Mirring guest concertmaster

モーツァルト/ピアノ協奏曲 第23番 イ長調K.488 (26')
(演奏者の要望により、予定されていた曲目から変更になりました)

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)
Piano Concerto No.23 A major K.488

休憩

Intermission

ブルックナー/交響曲 第3番 二短調(第1稿) (65')

Anton Bruckner (1824-96)
Symphony No.3 d minor (First version)

C program

第1560回 NHKホール
2/3 [金] 開演 7:00pm
2/4 [土] 開演3:00pm

The 1560th Subscription Concert
on 3rd (Fri.) & 4th (Sat.) February
at 7:00pm (Fri.) 3:00 pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 ヘルベルト・ブロムシュテット
ソプラノ I 幸田浩子
ソプラノ II 半田美和子
テノール 福井 敬
バリトン 河野克典
合唱 国立音楽大学
合唱指導 田中信昭、永井 宏
コンサートマスター ペーター・ミリング(客員)

Herbert Blomstedt conductor
KODA, Hiroko soprano I
HANDA, Miwako soprano II
FUKUI, Kei tenor
KONO, Katsunori baritone
Kunitachi College of Music chorus
TANAKA, Nobuaki NAGAI, Hiroshi chorus leaders
Peter Mirring guest concertmaster

モーツァルト/交響曲 第34番 八長調 K.338 (21')

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)
Symphony No.34 C major K.338

休憩

Intermission

モーツァルト/ミサ曲 八短調 K.427 (55')

Wolfgang Amadeus Mozart
Mass c minor K.427



指揮 conductor

ヘルベルト・ブロムシュテット

Herbert Blomstedt

精神の高揚を愛でる名誉指揮者ブロムシュテットが、十八番を携えて3年ぶりに(2003年2月定期以来)N響の指揮台に立つ。

1927年米マサチューセッツ州生まれ。両親の母国スウェーデンで育つ。ストックホルム王立音楽院やウプサラ大学で学び、さらにジュリアード音楽院、タンゲルウッド音楽祭、バーゼル、ザルツブルクなどでマルケヴィチやバーンスタインの薫陶を受けた。

ノールショピング交響楽団、オスロ・フィルハーモニー管弦楽団、デンマーク放送交響楽団、スウェーデン放送交響楽団、東独時代のドレスデン国立歌劇場管弦楽団の首席指揮者を経て、85/86年のシーズンから95/96年のシーズンまでサンフランシスコ交響楽団の音楽監督に就任。北ドイツ放送交響楽団の首席指揮者を短期間務めた後、98/99年のシーズンから昨年の夏まで、伝統と格式を誇るライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席指揮者(第18代ゲヴァントハウス・カペルマイスター)に迎えられ、現在、同管名誉指揮者。

ちなみにゲヴァントハウス管の首席指揮者就任披露公演で指揮したのはブルックナーの《交響曲第3番》、昨年7月の「お別れ」公演は《第8番》だった。同年5月のライプツィヒ・バッハ音楽祭では聖トーマス教会で《ミサ曲 ロ短調》を披露、この模様はBSでも放映された。

N響との出逢いは1981年11月。ただちに深い絆で結ばれ、86年1月に名誉指揮者となった。ここで声高に申すまでもなく、バッハの宗教曲からニルセンの交響曲まで、多くの名演奏をN響とN響の聴き手に授けてきた。

2006年は、思わずほほ緩むブラームスの夕べに生誕250年のモーツァルト選集、ライプワークのひとつブルックナーの《交響曲第3番》だ。ドイツを代表する、というよりも現代屈指の名ソリスト2人との交歓も楽しみ。今年79歳の名匠ブロムシュテットと今年創立80周年のN響が繰り広げるステージは、さて。

(奥田佳道)

ヴァイオリン violin

クリスティアン・テツラフ

Christian Tetzlaff



今年の4月29日で満40歳になるのだから、もう「若手」は卒業し、れっきとした「中堅」の域に入ったヴァイオリニスト。ハンブルク出身で6歳からヴァイオリンを始め、14歳のとき公開演奏を行っている。リューベック音楽大学を経て1985～86年には渡米し、シンシナティ音楽院でウォルター・レヴィンに師事した。言うまでもなく、レヴィンはラサール弦楽四重奏団のリーダーであると共に名教授としても知られる。テツラフが若きドイツの俊英と広く認められるようになるきっかけは、1988年、チェリビダッケ指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団と共演した折であるが、これは実は、年代的には1歳しか変わらない彼より先に名を挙げているフランク・ペーター・ツインマーマンの代役だった。

ツインマーマンとテツラフは、それから20年近くを経た今、ドイツを代表する俊秀ヴァイオリニストだと言える。先人たちが

らの伝統をより強く感じさせるツインマーマンに対し、テツラフには現代の音楽家としての自意識がみなぎっている。きわ立った運弓技術を大きな武器とする演奏ぶりは、現代の音楽はもとより、バッハやロマン派を弾いても、切れの良い爽快感に溢れている。使用する楽器が、現代ドイツの名工ペーター・グライナー作であることも、彼の意識を裏付けているようだ。とはいえ、テツラフの演奏は、決して機械的なものにはならず、かえって鋭敏な感性に富んで傾聴させる。成熟期に入った彼のブラームスはたいへん楽しみだ。

(濱田滋郎)

ピアノ piano

ラルス・フォークト

Lars Vogt



N響との共演は1998年2月12日のNHKホール、ホルスト・シュタイン指揮でグリーグの《ピアノ協奏曲》や2002年7月26日NHKホール、マルク・アルブレヒト指揮でのブラームス《ピアノ協奏曲第1番》、また2003年9月10日岩村力指揮でのラヴェル《ピアノ協奏曲》などが挙げられるが、何とんでも2003年4月のN響ヨーロッパ公演（ウィーン、ミュンヘン、ベルリン）において、体調不良を理由に急遽キャンセルしたマルタ・アルゲリッチの代役を見事に務めたことは記憶に新しい。

フォークトは1970年9月8日、ドイツのデュレンに生まれた。両親は音楽家ではなかったが、6歳からピアノを始めてルート・ヴァイスに師事、ドイツの「ユーゲント・ムジツィアート（若者のための音楽コンクール）」などで好成績を収めた。この頃はサッカーにも夢中、プロを目指したこともあってその名残か現在も「ボルシア・ミュンヘン・グラットバッハ」というチームのサポーター

を務める。ヴァイスには16歳まで学び、その後カール・ハインツ・ケマリングに薫陶を受けた。この頃ピアノ・トリオも結成、ドイツ、イタリアなどのコンクールへも出場を果たしている。

1990年のリーズ国際ピアノ・コンクールで第2位を受賞したが、そのとき伴奏オーケストラの指揮を務めたサー・サイモン・ラトルが強硬にフォークトの1位を主張、全ヨーロッパで注目を浴びた。以降世界的な活動を展開し、ラトルとの共演をはじめとするオーケストラとの協奏曲やリサイタルはもちろん、クリスティアン・テツラフ（ヴァイオリン）、ザビーネ・マイヤー（クラリネット）などとの緊密な室内楽でも、その類稀な才能を遺憾なく発揮している。

（真嶋雄大）

ソプラノ soprano

幸田浩子

KODA, Hiroko



東京芸術大学卒、同大学院修了、オペラ研修所第11期生修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてイタリアのボローニャで2年間の研修を積んだ。第2回ヒルデ・ツァデック国際コンクールで入賞および審査員特別賞ほか最多の特別賞を受賞したのを皮切りに、第15回イリス・アダミ・コラデッティ国際コンクール2位・審査員特別賞、第38回フランシスコ・ヴィニヤス国際コンクール3位・最優秀ソプラノ・レジュエロ賞。また、パドヴァ市よりアウレリアーノ・ベルティレ賞を、パヴァロッティとともに贈られた。第14回五島記念文化財団オペラ新人賞受賞。

東京芸大大学院在学中から数々のオペラ、コンサートに出演し、特に1998年、日生劇場《セヴィリアの理髪師》のロジーナに抜擢され、注目された。イタリア留学後はヨーロッパの歌劇場に次々にデビュー。ウィーン・フォルクスオーパーの

専属歌手を経て、現在ボローニャに在住して国際的な活躍を続けている。2001年にドイツ・ウルム歌劇場《魔笛》の夜の女王、ベルリーニ大劇場《清教徒》のエルヴィーラ、シュトゥットガルト国立劇場《皇帝テイトゥスの慈悲》のセルヴィリア、2002年にはローマ歌劇場《ホフマン物語》のオランピアなどに続き、日本では同年12月、《ナクス島のアリアドネ》のツェルビネッタで新国立劇場と二期会にデビューした。

最近は二期会《ばらの騎士》のゾフィー、新国立劇場《ホフマン物語》のオランピア、ミュージカル《キャンディード》のクネゴンデなどのほかりサイトルも開催。甘い音色の美声と安定した歌唱力、魅力的なキャラクターで急速に人気上昇している。

(関根礼子)

ソプラノ soprano

半田美和子

HANDA, Miwako



桐朋学園大学卒、同研究科修了。二期会オペラ・スタジオ第42期を修了し、そのおりに最優秀賞と川崎静子賞を得た。1999年第4回藤沢オペラ・コンクールに第1位入賞、同年、新国立劇場小劇場で行われた二期会特別オペラ公演《フィガロの結婚》のスザンナでオペラデビューした。

2001年には二期会創立50周年記念公演《ファルスタッフ》のナンネッタに抜擢されて、森麻季とダブルを組み、澄んだ美声と確かなテクニック、華のある舞台姿で喝采を浴びた。同役では2004年、新国立劇場にも出演し、見事な成果を収めている。オペラではこのほか新国立劇場小劇場シリーズ《花言葉》の主役ドンナ・ロシータ、藤沢市民オペラ《ボエム》のムゼッタ、日生劇場《ヘンゼルとグレーテル》のグレーテル、さらに日韓文化交流オペラ《春香》の香丹、《地獄のオルフェ》のユリディス、《こうもり》

のアデーレ、《電話》のルーシー、《魔笛》の童子など、幅広いキャラクターの役柄をこなしている。

コンサートにも多数出演しており、なかでも東京都交響楽団《夏の夜の夢》のソリストに出演した際には指揮ガリー・ベルティーニの信頼を得て、その後も《一千人の交響曲》などで共演している。ペトル・ブロンスキーとも、ヤナーチェク・フィルハーモニーとシンガポール・フィルハーモニーでモーツァルト《レクイエム》を共演。東京都交響楽団の《第9》、フォーレ《レクイエム》などにも出演。恵まれた資質と柔軟な表現力により、今後一層大きく羽ばたくことが予想される若手のホープである。

(関根礼子)

テノール tenor

福井 敬

FUKUI, Kei



国立音楽大学卒、同大学院修了、1989年第20回イタリア声楽コンクール第1位、1990年オペラ研修所修了、同年文化庁芸術家在外研修員としてイタリアに留学した。1992年に二期会創立40周年記念公演《ボエーム》のロドルフォで本格的にデビューして注目され、同年のジロー・オペラ賞新人賞を受賞。以来、多数のオペラで主演を重ね、張りのある輝かしい声と情感のある歌唱、常に安定したプロフェッショナルな表現力により、日本のオペラ界になくはならぬテノールの第一人者としての地歩を固めた。受賞も相次ぎ、1993年第4回五島記念文化賞オペラ新人賞、1994年第44回芸術選奨文部大臣賞新人賞、1997年ジロー・オペラ賞、第9回出光音楽賞、2003年エクソンモービル音楽賞などを総なめしている。

レパートリーは幅広く、新国立劇場、二期会、Bunkamura、びわ湖ホールほ

か各地の主要公演に出演。なかでも《トゥーランドット》のカラフ、《トスカ》のカヴァラドッシ、《群盗》のカルロ、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》のワルター、《ローエングリン》のローエングリン、《ルル》のアルヴァ、《アラベラ》のマッテオ、《こうもり》のアイゼンシュタイン、《ホフマン物語》のホフマン、日本作品では《罪と罰》のロージャ、《白鳥》の男などが鮮明な印象を残している。

(関根礼子)

バリトン baritone

河野克典

KONO, Katsunori



東京芸術大学卒、同大学院修了。ドイツ政府給費留学生としてミュンヘン国立音楽大学マイスタークラスに留学し、その後、ウィーン国立歌劇場研究員として研鑽を積んだ。1987年第43回ジュネーヴ国際音楽コンクール声楽部門で1位なしの2位に入賞したのを皮切りに、1990年第37回ヘルトゲンボシュ国際声楽コンクール歌曲部門第1位、ザルツブルク市賞など、数々の賞を得た。

ライン音楽祭、ザルツブルク音楽祭ほかヨーロッパ各地でコンサート、オペラ、宗教音楽などに活躍。日本では若杉弘指揮のNHK交響楽団定期でマラー《さすらう若者の歌》を歌い、みずみずしい歌唱力で注目を集めた。その後、日本の主要オーケストラで小澤征爾、ケント・ナガノ、クルト・マズア、ゲルト・アルブレヒト、ガリー・バルティーニ、ユベール・スダーンらと次々に共演している。

ドイツ歌曲の演奏はフィッシャー・ディースカウから高く評価されており、2001年から2002年にかけてシューベルト3大歌曲集の連続演奏会を開催。2003年には5年に及ぶ10回シリーズ「新・歌物語」をスタートさせ、その第2回「ヴォルフの世界」で平成15年度文化庁芸術祭優秀賞を受賞した。同シリーズは2006年1月に《冬の旅》、10月10日には「シューベルトの秋」の開催が予定されている。オペラは、最近、新国立劇場《ボエーム》のシヨナル、《フィデリオ》のドン・フェルナンドなどに出演して、確かな力量を発揮した。またCD録音は多数あり、代表的なものとしては、シューマン《詩人の恋》、シューベルト《白鳥の歌》《美しい水車屋の娘》をリリースしている。

<http://www.k-kono.com>

(関根礼子)

合唱 chorus

国立音楽大学

Kunitachi College of Music



今年創立80周年を迎えた国立音楽大学は、伝統的にアンサンブル教育を重視しており、とくに吹奏楽及びオーケストラと並び、合唱の教育・演奏活動に深い歴史を刻んできた。中でも合唱は学内での教育・演奏活動に加えて、対外的な活動を早くから積極的に繰り広げており、創立2年目の1927年12月に、奇しくも同大学と同じ年に創立されたNHK交響楽団(旧・新交響楽団)と初共演以来、今日まで幾多の共演を重ね常に高い評価を得てきた。近年、第一線で活躍している声楽家達の中に、同大学出身者が数多く見られるのも、そうした合唱の深い「伝統」と決して無関係ではないだろう。

N響とは、「第9」以外での共演も目立っており、1986年のN響定期演奏会1000回記念公演でメンデルスゾーンのオラトリオ《エリア》(指揮：W.サヴァリッシュ)に出演したのをはじめ、若杉弘指揮オネ

ゲルの劇的オラトリオ《火刑台上のジャンヌ・ダルク》(1989年、原語日本初演)他、記念的なコンサートでの出演も多い。また、昨年4月のベートーヴェン作曲《荘厳ミサ曲》(指揮：準・メルクル)の瑞々しい演奏が極めて高い評価を受けたのも記憶に新しい。

近年ではN響のみならず、読売日本交響楽団、東京都交響楽団等とも共演、さらに幅広い活動を繰り広げている。

第9回NHK交響楽団「有馬賞」受賞。

ブラームス Brahms

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品77

ヨハネス・ブラームス(1833-97)は、《交響曲第2番》完成の翌年の1878年、この曲と同じくオーストリア南にあるペルチャッハで、《ヴァイオリン協奏曲》に着手した。この曲は、大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒム(1831-1907)の存在なしには考えられない。

1853年、20歳のブラームスはヨアヒムと出会った。2人は互いの芸術観に共感し、1850年代から1870年代後半まで共演を重ねている。出会ってから25年経って、ブラームスは、ヨアヒムのためのヴァイオリン曲を実質上初めて作曲した。それがこの協奏曲である。

《ヴァイオリン協奏曲》の作曲過程で、ブラームスはヨアヒムに幾度となく相談している。最終的な判断はブラームスによるものだとしても、彼にとってヨアヒムの助言はきわめて重要であった。その端的な例が、楽章構成をめぐるものである。当初ブラームスは4楽章構成で作曲を進めていたが、ヨアヒムの助言を受け入れ、中間の2つの楽章を破棄、新たに緩徐楽章を作曲し3楽章構成にしたのであった。

なお、第1楽章にはカデンツァがある。多くのヴァイオリニストや作曲家がカデンツァを残しているが、作曲に深く関わっ

たヨアヒムのものが広く親しまれている。本日も、ヨアヒムによるものが演奏される予定である。

第1楽章：アレグロ・ノン・トロppo、二長調、3/4拍子。クララ・シューマンが、二長調の《交響曲第2番》と「きわめてよく似た情緒」と呼んだ楽章。牧歌的な雰囲気と情熱的なパッセージとの対比が効果的に構成されている。**第2楽章**：アダージョ、へ長調、2/4拍子。管楽合奏ではじまり、オーボエ・ソロが美しい主題を奏でていく。**第3楽章**：アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロppo・ヴァーチェ、二長調、2/4拍子。独奏ヴァイオリンの重音によって軽快にはじまり、ハンガリー風の舞踏音楽が展開していく。

作曲年代：1878年

初演：1879年1月1日ライプツィヒで、ヨーゼフ・ヨアヒムのソロ・ヴァイオリン、作曲家指揮のライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団による

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、独奏ヴァイオリン

(西村 理)

ブラームス Brahms

交響曲 第1番 ハ短調 作品68

作曲家としてだけでなく音楽批評家としても活躍していたシューマンは、1853年10月28日発行の『音楽新報』で「新しき道」と題する批評を掲載した。ここでシューマンは、若きヨハネス・ブラームス(1833-97)のピアノ・ソナタを「ヴェールで覆われた交響曲」と評し、この作曲家を将来の交響曲作曲家として期待した。しかし、ブラームスは、ベートーヴェン以降に交響曲を作曲することに困難を感じ、なかなか期待に応えることができなかった。《交響曲第1番》の完成は1876年、ブラームスが43歳のときであった。

当時すでに室内楽や合唱曲の分野で評価されていたブラームスが、最初の交響曲を作曲したこともあって、この交響曲は多くの人々から注目を集めた。音楽批評家エドゥアルト・ハンスリックは、1876年12月17日のウィーン初演について「音楽界全体が、1人の作曲家の最初の交響曲をこれほどまで切に待ち望んでいたことはかつてない」と述べている。

《交響曲第1番》は初演以降ドイツ語圏の各都市はもとより、モスクワやボストンでも演奏された。そうした演奏の批評のなかで終楽章の第1主題が、繰り返しベートーヴェンの《第9番》の「歓喜の歌」

に似ていると指摘された。そして1877年には、指揮者のハンス・フォン・ビューローがこの交響曲を「[ベートーヴェンの]第10番」と名づけ、この呼称は瞬く間に広まっていった。

ビューローはベートーヴェンの模倣という意味で、「第10番」と呼んだのではなかった。逆に、ブラームスをベートーヴェンの継承者として位置づけようとしたのである。この位置づけには、当時のブラームス派とワーグナー派との音楽美学上の対立が関係している。

ワーグナーは、《第9番》で声楽が用いられることで、純粋な器楽曲としての交響曲は終焉し、未来の芸術作品として「楽劇」が到来することを宣言していた。それに対して、ハンスリックに代表されるブラームス派は、声楽や標題から自由な絶対音楽を理想としていた。そのブラームス派にとって、《第1番》は特別な意味を持った。ブラームスの友人で音楽学者のフリードリヒ・クリュザンダーは、1878年1月18日のハンブルクでの演奏批評で、この交響曲を「特殊音楽的な内容だけではなく音楽の発展においても重要である」と指摘し、ベートーヴェンの《第9番》で絶対音楽から逸れてしまった交響曲の歴史がブラームスの《第1番》

によって軌道修正されたと考えた。

1880年代にはビューローは、バッハとベートーヴェンにブラームスを加えて、「ドイツの3大B」と呼び、ドイツ音楽の規範とした。彼によれば、「バッハは父なる神、ベートーヴェンは神の子、ブラームスは聖霊」だったのである。

なおビューローは、当初はワーグナー派に属していた。そのビューローが1870年代にブラームス派に転向したのは、妻のコジマがワーグナーとの親密な関係になったからだと言われることが多い。しかし、近年のビューロー研究を参照するならば、ビューローは自身とワーグナーとの音楽美学上の違いが浮き彫りになってきたため、ブラームスを評価するようになったと考えるほうが妥当であろう。

第1楽章：ウン・ポーコ・ソステヌート——アレグロ、ハ短調、6/8拍子。序奏部をともなうソナタ形式。序奏部の冒頭のヴァイオリンとチェロに現れる上行の半音階は、全曲を貫く素材として何度も聞こえてくる。力強いスタッカートによって主部が始まる。**第2楽章：**アンダンテ・ソステヌート、ホ長調、3/4拍子。3部形式による美しい緩徐楽章。**第3楽章：**ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ、変イ長調、2/4拍子。3部形式。ピチカー

トの伴奏でクラリネットが主題を奏でる。

第4楽章：アダージョ、ハ短調、4/4拍子——ピウ・アンダンテ、ハ長調。序奏部をともなうソナタ形式。暗く重々しい部分に続いて、ホルンが「アルペンホルンの主題」と呼ばれる長調の明るいメロディーを奏でる。このメロディーは1868年にクララ・シューマンの誕生日にブラームスがスイスから送ったカードに記されていたもの。「歓喜の歌」を想起させる第1主題が奏でられ主部に入る。この第1主題はコーダでは凱歌として登場せずに断片化されている。代わりに、序奏部でトロンボーンによって提示されたコラールが力強く現れる。それはベートーヴェンの《第9番》を乗り越えたかのように響く。

作曲年代：遅くとも1862年に着手、1876年に完成。1877年に第2、第3楽章を改訂。

初演：1876年11月4日カールスルーエで、オットー・デッツォフの指揮による

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽

(西村 理)

モーツァルト Mozart

ピアノ協奏曲 第23番 イ長調 K.488

1786年にウィーンで書かれた3曲のピアノ協奏曲の第1曲で、同年の3月2日に完成した。モーツァルト30歳の作品で、普通なら「若書き」といえるが、このとき約5年の命しか残されていない彼にとって、この時期の作品は円熟期の作品と言え、実際、交響曲《ハフナー》《リンツ》、オペラ《フィガロの結婚》など多くの傑作を生んでいる。

この作品の特徴は、《第20番》の協奏曲と比べても分かる通り、オーボエの代わりに2本のクラリネットが使われ、しかもトランペットもティンパニもない。それゆえオーケストラのなかでクラリネットの甘美な音色がブレンドされた柔らかい響きがピアノと美しい対話を交わしていく。また、冒頭の旋律の下で低弦のオルゲル・プンクト(持続低音)が聴かれる。これはベートーヴェンの《交響曲第6番「田園」》の冒頭でも使われており、パストラル持続低音と呼ばれ、牧歌的な雰囲気を醸し出している。この低音は第3楽章でも所々使われ、終曲の華やかさを引き立てている。

第1楽章：アレグロ、イ長調、4/4拍子 ソナタ形式。晴れやかな風を運ぶような田園的な雰囲気の楽章。

第2楽章：アダージョ 嬰へ短調、6/8拍子、3部形式。モーツァルトにはとても珍しい調で書かれている。ピアノのシチリアーナが美しく、悲しげに歌う。

第3楽章：アレグロ・アッサイ、イ長調、2/2拍子、ロンド形式。前楽章の憂愁を吹っ切るように颯爽とピアノが言い切るように始まる。ピアノとオーケストラが繰り返すニュアンス溢れた対話が展開され、最後はいっそう魅力を増して、華やかに曲を閉じる。

作曲年代：1786年3月2日完成、ウィーン

初演：記録なし。

楽器編成：フルート1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦楽、独奏ピアノ(クラヴィール)

(三橋圭介)

ブルックナー Bruckner 交響曲 第3番 二短調 (第1稿)

アントン・ブルックナー(1824-96)の《交響曲第3番》には、3つの「稿」(Fassung, version)がある。このうち1889年に書かれた第3稿が最も多く演奏され、1877年に作成された第2稿も指揮者の好み等に応じて時たま演奏されるが、本日演奏される第1稿は、まれにしか演奏されないヴァージョンである。

ブルックナーは、《交響曲第2番》が完成してまもない1872年秋に《交響曲第3番》を書き始め、翌年の7月までに最初の3つの楽章を仕上げた。8月1日には終楽章の総譜を書き始めたが、ウィーンにコレラが流行したために、ブルックナーはマリーエンバート(現在はチェコのマリアンスケ・ラズネ)に難を逃れ、同月31日、この地で終楽章の総譜を一通り完成させた。

マリーエンバートはチェコの西端に位置し、ここからそれほど遠くないバイロイトでは、リヒャルト・ワーグナーが彼の楽劇を理想的な形で上演することを目指して祝祭劇場の建設に力を入れていた。ブルックナーは尊敬する巨匠に自分の作品を見てもらうことを決意し、バイロイトに足を延ばし、9月13日、面会を許された。彼は《交響曲第2番》のスコアと、一通りできたばかりの《交響曲第3番》のスコアをワーグナーに見せて、献呈を申し出た。その結果、受け入れられたのは後者であった。ブルックナーはウィーンに帰ってからもさらに手を入れ、その年の大晦日の夜、完成させた。

ブルックナーは年が明けてから、彼のコ

ピストに筆写総譜を2部作成させて、うち1部を「詩ならびに音芸術の、到達されざる、世界に名だたる、高貴なる巨匠、リヒャルト・ワーグナー」(タイトル・ページ。新全集Ⅲ／1に写真が見られる)に贈った。もう1部は8月1日にウィーン・フィルに送った。もちろん演奏されることを期待したのであるが、秋に行われた「新作試演会」には採り上げられたものの、演奏会の曲目には選ばれず、そのことが第2稿に向かう改訂へのきっかけとなったと考えられている。

第1稿が改めて浮上してきたのは、20世紀に入って、ローベルト・ハースによる原典版の出版(旧全集)が始まってからであった。ハースは1944年、ワーグナーへの献呈譜をもとに出版の作業を進め、総譜の校正刷りができ上がる段階にまで達した。これはその後の戦時の混乱のために未出版となったが、1946年12月1日、それらの印刷資料を用いてヨーゼフ・カイルベルトの指揮による初演がドレスデンで行われている。

第1稿の出版は、1977年、レオポルト・ノヴァークにより新全集Ⅲ／1として実現した。彼はハースと同様、ワーグナーへの献呈譜を基礎とし、もう1つの筆写総譜のほか、ハースが当時用いることのできなかったブルックナー自筆の手稿を参照した。この手稿(オーストリア国立図書館音楽部門所蔵 音楽手稿19.475)は、実は第2稿となっているものである。ブルックナーは第1稿の自筆総譜に直接手を加え、削除や差し換えなどを行いながら第2稿を作成したので、

この曲については、まとまった形での、自筆の第1稿というものは存在しないのである。

第1楽章：中庸のテンポで、神秘的に、ニ短調、2/2拍子。3つの主題によるソナタ形式で構成されているが、規模は後の2つの稿よりも100小節近くも長く、746小節となっている。後の稿にない大きな特徴は、展開部の終わりにワーグナーの《トリスタン》や《ワルキューレ》からの引用と思われる楽句が置かれている点である。これらの楽句はワーグナーへの信奉の表れと見られるものであるが、ブルックナーがバイロイトにワーグナーを訪ねた段階でできていたか、それとも訪問後に書いたものかは「未解決」との指摘もある(トーマス・レーダー『校訂報告』1997年)。

第2楽章：アダージョ、荘厳に、変ホ長調、4/4拍子。この楽章は、①アダージョ②アンダンテ③いっそう遅く、ミステリオソ④アンダンテ⑤アダージョ⑥アンダンテ⑦いっそう遅く⑧アダージョと、一見複雑な構成であるが、基本的にはアダージョの主要主題が、初現、再現、三現し、それぞれの登場の間に他の楽節が繰り返し現れるという、ブルックナーの緩徐楽章の基本パターンに従っている。後の稿では⑤の主要主題の再現の部分が完全に失われ、これによって楽章の5部分的区分が不明確になってゆくの、第1稿こそが最も本来的な構成といえよう。

第3楽章：スケルツォ、かなり速く、ニ短調、3/4拍子；トリオ、同じテンポで、イ長調、

3/4拍子。この楽章は《第3交響曲》のすべての稿を通じて最も改変されることの少なかった楽章である。とはいえ、第2稿以下にある、弦のパートのくさび形のスタッカートがここにはまだなく、耳での印象はずいぶん異なるかもしれない。

第4楽章：フィナーレ、アレグロ、ニ短調、2/2拍子。3つの主題によるソナタ楽章である。後の稿とは多くの個所で異なるが、例えば、第1主題の最後の2小節が総休止となっていること、嬰へ長調の第2主題が4小節の序奏を置いてから開始されること、この主題のコラールの楽句が木管によっても奏されていることなどは、とりわけ目立った個所といえよう。また、この楽章は764小節と実に長い、第2稿では638小節、第3稿では——再現部において第1主題がカットされるなど——495小節へと短縮されるのである。

作曲年代：1872年秋～73年12月31日

初演：1946年12月1日ドレスデンで、ヨーゼフ・カイルベルトの指揮による

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽(以上、第2、第3稿も同じ)

(根岸一美)

モーツァルト Mozart

交響曲第34番 ハ長調 K.338

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)は短い生涯に41曲もの交響曲を書いた。この《第34番》K.338は、1780年に完成されたザルツブルク時代の最後の交響曲である(ちなみに、本日のプログラムはザルツブルク時代最後の《交響曲第34番 ハ長調》と、1781年以降のウィーン時代の最初の宗教曲〔ハ短調〕の組み合わせとなる)。

特に祝祭的な第1楽章の、マンハイムからパリ旅行で学んだ書法を結集するような斬新な転調など、ウィーン時代の後期の名作交響曲に向かって1歩踏み出そうとする意欲が感じられる。さらにザルツブルク風の3楽章制からウィーン風のメヌエット付き4楽章制という交響曲の図式から見ると、この《第34番》はウィーン風の第3楽章のメヌエットがスケッチの形で残され(自筆譜では14小節まで完成。繰り返し記号はなく、取り消し線により全体が破棄されている)、すでに新たな方向へと旅立とうとしていたことが伺える。

この曲はモーツァルトがウィーンで勝負する曲となり、ヴァイオリンだけで40人を擁する大オーケストラで演奏したりしている。「交響曲はとてもうまくいき、大成功を収めたことを先日お伝えする

のをすっかり忘れていました。40人のヴァイオリン、管楽器はすべて重複、ヴァイオリン10人、コントラバス10人、チェロ8人、6人のファゴットという編成でした」(1781年4月11日付けの父に宛てた手紙より)。

曲は以下の3楽章から構成される。

第1楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ
ハ長調 4/4拍子 ソナタ形式

第2楽章：アンダンテ・ディ・モルト
ヘ長調 2/4拍子 ソナタ形式

第3楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ
ハ長調 6/8拍子 ソナタ形式

作曲年代：1780年8月29日

初演：おそらく1780年9月2日から4日の
宮廷音楽会

楽器編成：オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、
トランペット2、ティンパニ1、弦楽

(三橋圭介)

モーツァルト Mozart ミサ曲 ハ短調 K.427

モーツァルトは20曲のミサ曲を残しているが、そのほとんどは宮廷音楽家としてザルツブルクの大神父に仕えていたころの仕事である。そのなかでは1777年に作曲された《戴冠式ミサ曲》ハ長調K.317が特に有名だが、その翌年にモーツァルトは《荘厳ミサ曲》ハ長調K.337を書き上げ、以降、1781年から亡くなるまでの11年をウィーンで過ごすことになる。宮廷の教会音楽から解放されたモーツァルトがその後作曲した宗教曲が少ないのは当然であり、3曲しかない。《ミサ曲 ハ短調》(通称「大ミサ」)と《レクイエム》ニ短調、そしてモテト《アヴェ・ヴェルム・コルプス》で、これらの曲は宮廷音楽家の義務ではなく、自らの意思で作曲され、しかもそのいずれもがモーツァルトの宗教音楽を代表する作品になっている。ただし1791年の《アヴェ・ヴェルム・コルプス》(1791)以外は未完成である。

ミサ曲は、《アヴェ・ヴェルム・コルプス》《レクイエム》(1791)よりも前の1782年8月以降から83年にかけて作曲されたとされている。1782年8月4日にモーツァルトは父の反対を押し切ってコンスタンツェと結婚したが、結婚できたら父と神に感謝を表す目的でこのミサは書かれ

た。初演はモーツァルトがコンスタンツェを連れてザルツブルクに帰郷したこの期間の10月26日、聖ペテロ教会で行われた。ソプラノを歌ったのがコンスタンツェだったが、結局、父の許しを得ることはできなかった。

ミサ曲はウィーン時代の最初の宗教曲で、宮廷の仕事としてではなく自らの意志で書かれた最初の宗教曲でもある。当地でバッハやヘンデルなどのバロック時代の宗教音楽に触れたことで、ポリフォニックなスタイルを吸収し(グロリアにおけるポリフォニックとホモフォニックの響きの変化、クム・サンクト・スピリトゥの4声フーガなど)、また、イタリアのカンタータの流れを汲むアリアや重唱(ラウダス・テにおける技巧的なソプラノやドミネの2重唱など)を取り入れている。このことはヨーゼフ2世統治下のウィーンの教会音楽の規制を大きく打ち破る音楽的な実験であり、完成していればバッハの短調ミサ曲に匹敵する長さになったかもしれない。

全体は以下のように構成される(本日の演奏は、未完の補筆を最小限に留めたヘルムート・エーダー版によっている)。

第I曲 キリエ アンダンテ・モデラー

ト ハ短調 4/4拍子

ラルゴ ハ長調 4/4拍子

第Ⅱ曲 第1曲グロリア アレグロ・
 ヴィヴァーチェ ハ長調 4/4
 拍子

第2曲ラウドムス・テ アレグ
 ロ・アペルテ ハ長調 4/4
 拍子

第3曲グラツィアス アダー
 ジョ イ短調 4/4拍子

第4曲ドミネ アレグロ・モ
 デラート ニ短調 3/4拍子

第5曲ウィ・トリス ラルゴ
 ト短調 4/4拍子

第6曲クオニアム アレグロ
 ホ短調 2/2拍子

第7曲イエズ・クリステ ア
 ダージョ ハ短調 4/4拍子

第8曲クム・サンクト・スピリ
 トウ ハ長調 2/2拍子

第Ⅲ曲 第1曲クレド(・イン・ウナム・
 デウム) アレグロ・マエス
 トーソ ハ長調 3/4拍子

第2曲エト・インカルナトウ
 ス・エスト ハ長調 6/8拍
 子

第Ⅳ曲 サンクトウス(ホザンナ)

第Ⅴ曲 ベネディクトウス(ホザンナ)
 アレグロ・コモド ハ長調
 4/4拍子

作曲年代：1783年(完成部分)

初演：1783年10月26日、聖ペテロ教会

楽器編成：フルート1、オーボエ2、ファゴッ
 ト2、ホルン2、トランペット2、ト
 ロンボーン3、ティンパニ1、弦楽、
 オルガン、ソプラノ独唱2、テノー
 ル独唱1、バス独唱1、混声合唱

(三橋圭介)

モーツァルト ミサ曲 ハ短調 K.427

Mozart Mass c minor K.427

I . Kyrie

“Kyrie”

Kyrie eleison.
Christe eleison.
Kyrie eleison.

II . Gloria

“Gloria in excelsis Deo”

Gloria in excelsis Deo,
et in terra pax hominibus
bonae voluntatis.

“Laudamus te”

Laudamus te, benedicimus te,
adoramus te, glorificamus te.

“Gratias”

Gratias agimus tibi propter
magnam gloriam tuam.

“Domine”

Domine Deus, Rex caelestis,
Deus Pater omnipotens.
Domine Fili unigenite, Jesu Christe.

Domine Deus, Agnus Dei, Filius Patris.

“Qui tollis”

Qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Qui tollis peccata mundi, suscipe
deprecationem nostram.
Qui sedes ad dexteram Patris,
miserere nobis.

“Quoniam”

Quoniam tu solus Sanctus,
tu solus Dominus,
tu solus Altissimus.

I . キリエ

主よ、あわれみたまえ。
キリストよ、あわれみたまえ。
主よ、あわれみたまえ。

II . グロリア

天のいと高きところには神に栄光、
地には善意の人に平和あれ。

われら主をほめ、主をたたえ、
主を拝み、主をあがめる。

主の大いなる栄光のゆえに
感謝し奉る。

神なる主、天の主、
全能の父なる神よ。
主なる御ひとり子、イエス・
キリストよ。
神なる主、神の小羊、父のみ子よ。

世の罪を除きたもう主よ、
われらをあわれみたまえ。
世の罪を除きたもう主よ、
われらの願いを聞き入れたまえ。
父の右に座したもう主よ、
われらをあわれみたまえ。

主のみ聖なり、
主のみ王なり、
主のみいと高し。

“Jesu Christe”

Jesu Christe.

イエス・キリストよ。

“Cum Sancto Spiritu”

Cum Sancto Spiritu, in gloria
Dei Patris.
Amen.

聖靈とともに、
父なる神の栄光のうちに。
アーメン。

Ⅲ. Credo

“Credo in unum Deum”

Credo in unum Deum,
Patrem omnipotentem, factorem
caeli et terrae,
visibilem omnium et invisibilem.
Et in unum Dominum
Jesum Christum, Filium Dei
unigenitum.
Et ex Patre natum ante
omnia saecula,
Deum de Deo, lumen de lumine,
Deum verum de Deo vero.
Genitum, non factum,
consubstantialem Patri,
per quem omnia facta sunt.
Qui propter nos homines,
et propter nostram salutem,
descendit de caelis.

Ⅲ. クレド

われは信ず、唯一の神、
全能の父、天と地、
見ゆるもの、
見えざるもの、すべての造り主を。
われは信ず、唯一の主、
神の御ひとり子、
イエス・キリストを。
主はよろず世のさきに、
父より生まれ、
神よりの神、光よりの光、
まことの神よりのまことの神。
造られずして生まれ、
父と一体なり、
すべては主によりて造られたり。
主はわれら人類のため、
また、われらの救いのために
天よりくだりたまえり。

“Et incarnatus est”

Et incarnatus est de Spiritu Sancto
ex Maria Virgine, et homo factus est.

聖霊によりて、おとめマリアより
御からだを受け、人となりたまえり。

Ⅳ. Sanctus

“Sanctus”

Sanctus, Sanctus, Sanctus, Dominus
Deus Sabaoth!
Pleni sunt caeli et terra gloria tua.

Ⅳ. サンクトゥス

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
万軍の神なる主。
主の栄光は天地に満つ。

“Osanna”

Osanna in excelsis!

天のいと高きところにホザンナ。

Ⅴ. Benedictus

“Benedictus”

Benedictus qui venit in nomine
Domini.
osanna in excelsis!

Ⅴ. ベネディクトゥス

ほむべきかな、
主の名によりて来たる者
天のいと高きところにホザンナ。

(『ミサ典礼書』による)